



Title	ex votoの謎 : セディロの聖コンスタンティヌスに返礼する人びと
Author(s)	井本, 恭子
Citation	AULA NUOVA イタリアの言語と文化. 2007, 6, p. 29-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93760
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エクス・ヴォート

ex voto の謎

ーセディロの聖コンスタンティヌスに返礼する人びとー

井 本 恭 子

はじめに

人びとの生活のなかにくみこまれたカトリックを、純粹教義でも教会史でもないところで、何とか解釈できないものか。そのときどきの心的状況に応じて、神や聖人やマリアに向う多信心な人びとの「世界観」として、イタリアにおけるカトリックを捉えられないものか。そんなことを漠然と考え、まずは「現場」に足を踏み入れて「体験」することからはじめようと、サルデーニャ中部に点在する教会をただひたすら見てまわり、気づいたことを次から次へとノートに書きつけていった。その後、本格的な調査をすることもなく、目先の仕事をこなしているうちに、7年余りの月日が流れてしまった。もちろん、その間に人びとが解釈した世界の表象としてのカトリックへの関心が消えたわけではなく、何となく「気になる存在」として頭の隅っこにはあった。それが、モースの『贈与論』を読みなおしていたとき、モノを媒介とした人と超自然的なものとのコミュニケーションという形で、前面に引っ張り出されたのである。

憑かれたように当時のフィールドノートをめくり始めると、山上や海辺や田園にぽつんと建っていた教会と信仰する人びとをめぐる記憶とともに、「なぜそれは村の外にあって、^{サントゥアリオ}＜聖なる場所＞と呼ばれているのか?」「なぜ返礼が^{エクス・ヴォート}ex voto というというモノでなければならないのか?」といった素朴な疑問がよみがえってきた。そして、カトリックの言葉で表された彼らの世界に、再び呼び戻されることになる。奉納した人びとの「経験」が表れたモノ、あのセディロの聖コンスタンティヌス教会の壁を埋めつくし

ていた^{エクス・ヴォート} ex voto の謎に、惹きつけられてしまったのである。

本稿では、まずカトリックにおける^{エクス・ヴォート} ex voto をどのような視点で捉えるのかを問うことから始める。次いで、セディロの聖コンスタンティヌス教会（サルデーニャ島）を事例とし、個人レベルで実践される奉納行為と奉納されたモノから返礼のメカニズムを描いてみる。そして、「返礼」という形で「言い表しえない」ものを「言語化」（^{エクス・ヴォート} ex voto の奉納という行為によって）する人びとについて、若干の考察を試みることにしたい。

現象としての^{エクス・ヴォート} ex voto

祈願後の感謝、誓願を果たすしるしとして納められたモノを^{エクス・ヴォート} ex voto と呼ぶのだが、その奉納先はカトリックにおいては、神ではなくマリアや聖人である⁽¹⁾。別言すれば、現実生活における個人、あるいは集団の状況に応じて、さまざまな姿となって現れる聖者への返礼が、^{エクス・ヴォート} ex voto を奉納するという行為によって示される。もっとも、お礼を何らかの形で表すという点では、巡礼、聖祠の建立、祭りなども奉納行為の一種であるから、^{エクス・ヴォート} ex voto はそのうちのひとつにすぎない。しかし、ここでは「品物による返礼」に着目するため、対象を^{エクス・ヴォート} ex voto に限定したい。

では、その「品物」とはどのようなもののなか。
現代の一般的な^{エクス・ヴォート} ex voto は、中心に十字が刻まれたハート型の鋳物で、そのハートの上にリボンがかけられているが、メッセージや奉納者の写真が添えられている場合もある（写真1）。このように規格化された^{エクス・ヴォート} ex voto のほかに、脚や耳や手をテラコッタ、銅、蝋、木ぼりで象ったもの、tavoletta votiva と呼ばれる奉納絵などがあり、地域や時代によってさまざまな形をとっている。教会側は、そのような^{エクス・ヴォート} ex voto の慣行を「異教的な風習」と見なしつつも、

写真1 ex voto

完全に排除することなく、最終的には *pietà popolare* 「民衆の信心」と解釈し、信仰のなかに包摂している⁽²⁾。もっとも、民衆が奉納するモノは何でも受け入れたわけではない。カトリックの倫理と聖なる場所の礼儀にそぐわないようなモノ、たとえば、性器や内臓や動物を象ったものは、ただちに破壊された。つまり、人びとの奉納行為は「品物」のタイプとともに、カトリックの文脈で捉えなおされながら、連続的に引きつがれているのである。彼岸ではなく此岸に、マリアや聖人を介在させる人びとの志向性が、^{エクス・ヴォート} *ex voto* を支え続けていると言ってもよからう。

何かを意味しようとする志向の表われとして ^{エクス・ヴォート} *ex voto* を捉えるならば、これはもう単なるモノではなく、「物語つきの事物」である。しかも、その「物語」は、「私のもの」であると同時に「みんなのもの」でもあるという二重の意味を含んでいる。確かに、^{エクス・ヴォート} *ex voto* は個人的な体験に動かされて納められたものだが、聖祠や祭壇に吊りさげられれば、その体験は他者によっても共有される。言い換えれば、個人的記録（病気、事故、災害などで命を落とすことがなかったという個人的な体験）が語られる／読みとられる、のである。このとき、^{エクス・ヴォート} *ex voto* は個人的な記録から集団の記憶装置に変身する。もちろん、そのためには、民俗コードによる理解にもとづいた「物語」でなければならない。

このように ^{エクス・ヴォート} *ex voto* を志向と言葉が融合した「物語つきの事物」と考えるのが、筆者の立場であり、本稿の目的はその意味を読み解くことにある。すでに言葉になった世界ではなく、人びとが生きている世界をどう分節化してゆくのか、そのプロセスを追ってみたいのである。別言すれば、民俗コードによって解釈される世界を ^{エクス・ヴォート} *ex voto* という現象のなかに見いだすことである。これまでの ^{エクス・ヴォート} *ex voto* 研究では、聖俗の区分を所与のものとし、聖なるものが分離される過程はあまり問題にされなかった。むしろ、^{エクス・ヴォート} *ex voto* の起源やその歴史の解明、マリアや聖人にモノを贈る人びとの思考形式、*tavolette votive*（奉納絵）の分析といった方に目が向けられてきた。そこにある種の疑問を感じたので、与件を解体して民俗コードで読み

なおしてみようと思ったわけである。言うまでもないが、このコードは筆者によって構築されたものにすぎないので、そのズレはフィールドと理論を往復しながら埋めてゆくしかない。

さて、少し遠回りになるかもしれないが、ここでイタリアの^{エクス・ヴォート} ex voto をめぐる主な解釈を簡単にまとめておくのも、あながち無駄とも言えないだろう。たとえ現象全体を説明するものではないとしても、それぞれに一理あることは否めないのだから。考古学、民俗学、宗教学、人類学など、さまざまな学問分野で^{エクス・ヴォート} ex voto 研究が行われている（ときには横断的に）ことを考えれば、個々のアプローチを網羅するのは筆者の手に余るが、その切り口に関しては、通時的なものと共時的なものに大別されることくらいは見当がつく。この通時・共時の軸に従えば、^{エクス・ヴォート} ex voto のさまざまな側面の解釈も、歴史性か存立構造の問題に還元されると言ってよい。その代表的な解釈を三つ紹介しておこう⁽³⁾。

- ① ^{エクス・ヴォート} ex voto はキリスト教以前の信仰の残存である。
- ② 奉納絵は個人の不安な状態を克服する手段である。
- ③ 奉納は贈与交換である。

進歩史観的な解釈①は、^{エクス・ヴォート} ex voto を「遅れた社会」に見られるキリスト教以前の信仰、呪術的な思考の残存とみなす。マリアや聖人への^{エクス・ヴォート} ex voto は、古代の神々への供犠、供物が、カトリックによって読みかえられて残ったものだという説明である。人間の身体を象ったものをせつせと納めるのも、髪や爪のように身体から切り離されたものと当の人間の身体の間に存在するような共感関係が、^{エクス・ヴォート} ex voto とその奉納者にもあるというような呪術的な思考に支えられているからだと言う。このような歴史的解釈に対して、②と③は^{エクス・ヴォート} ex voto を共時的な面から捉え、モノと一体となった行為を説明している。②は負の力によって脅かされた人間存在が、異常な状況を「物語」（絵）にして「外部」に放出（奉納）させ、安定を回復させるために、奉納絵を必要とするという心理学的な解釈である。つまり、自己存在が、突然、揺らいだとき、人間はその不安を克服するために、何らかの形

でそれを言表するという考えである。③は、「与え、受けとり、返す」という一連のサイクルのなかにある^{エクス・ヴォート} ex voto を、聖なるものと信者の贈与交換とみなす。ただし、マリアや聖人のように目に見えない相手との交換では、互酬性の原理が働かないので、「返済」の義務は信者のみに課せられることになるという。奉納は、聖なるものと信者の間にある連帯と従属という二重の関係を示すものだということである。

以上、^{エクス・ヴォート} ex voto をめぐる解釈のエキスだけを抽出してみた。どれも^{エクス・ヴォート} ex voto の一面を捉えていて興味深いのだが、奉納する対象、奉納されるモノ、奉納者、奉納場所、奉納の原因といったものの絡み合い、錯綜体としてまるごと引きうけてくれるものではないように思われる。そこで、本稿では、志向が対象をもとめ、言葉になって意味をもつ、まさにその過程が、行為とモノが一体となって表われた^{エクス・ヴォート} ex voto にあると考え、カトリックの文脈を解体して、調査地の人びとのコードで理解された世界を記述する。それはまた、取り込まれたものではなく、彼らを取り込んだカトリックを、奉納という具体的な事実のなかにみてゆくことでもある。現象としての^{エクス・ヴォート} ex voto のうちにこそ（不在の深層にではなく）、本質は存在する。

セディロの<^{サントゥアリオ}聖なる場所>：^{エクス・ヴォート}聖コンスタンティヌスと ex voto

カトリックにおいては、マリアや聖人への返礼が^{エクス・ヴォート} ex voto とされるが、現実生活のどんな場面で、どのような姿になって現われた聖者に、どうしてお礼をするのか。セディロにある聖コンスタンティヌスの^{サントゥアリオ}サントゥアリオに奉納された^{エクス・ヴォート} ex voto という具体的な事物に沿って考えてみよう。その際、メモにすぎない筆者のフィールドノートではなく、Maria Margherita Satta 著 *I miracoli per grazia ricevuta: Religiosità popolare in Sardegna* [2000] のなかで用いられた^{エクス・ヴォート} 125の ex voto の記録（1900年から1987年までに奉納されたもの）に依拠することをあらかじめ断わっておきたい⁽⁴⁾。

聖コンスタンティヌスのサントゥアリオは、村から南東へ約4キロ、見

晴らしのよい高台にある。ここは村の教会と違ってふだんは閉められていて、聖コンスタンティヌスの祭りのときだけ開けられる。はじめてサントゥアリオを訪れたのは9月、ひっそりとした田園に、まるで忘れ去られた

写真2 聖コンスタンティヌスのサントゥアリオ

祠のようにぽつんと建つ教会の不思議な光景に目を奪われた。もちろん、教会の扉は固く閉ざされおり、なかに入るためには、村の教区司祭（聖ジョヴァンニ教会）に頼んで開けてもらわねばならなかった。信徒会のメンバーによって選出された ^{プリオーレ} priore ⁽⁵⁾（代表者）が、「田園の教会」の鍵をもっている場合もあるが、このサントゥアリオは教区教会にしっかり管理されている。ということは、^{エクス・ヴォート} ex voto は空間的にも時間的にも制限されている可能性が高いことになる。

では、実際に、教会の壁一面、柱までも埋めつくしている ^{エクス・ヴォート} ex voto を見てみよう。先にも述べたように、奉納は個人的かつ自発的な行為であるため、お礼の品物のタイプは人によって異なる。Satta の用いた125の ^{エクス・ヴォート} ex voto をみても、規格製品のハート型（写真3）、絵（写真4）、写真のモンタージュ（写真5）、刺繍（写真6）などさまざまである。また、バリエーションも多く、たとえば、同じハート型でも肖像写真だけのものもあれば、

写真5 写真による ex voto

写真6 刺繍の ex voto

聖人カードも一諸に添えられているものもある。逆に種類が違って、肖像写真や聖人カードの有無において同じといった場合もある。(写真7)

このような個別性を確認しても意味がない。はじめからわかっていることである。雑多なよう
エクス・ヴォート
 に見える ex voto に秩序を見い

写真7 肖像写真と聖人カードが貼られた奉納絵

ださねば、他者の了解のうえに成り立っているものではない。つまり、
エクス・ヴォート
 ex voto は単なる私的な体験の記録に過ぎないということになる。果たして
エクス・ヴォート
 そうなのか。答えは否である。ex voto に示された内容、表現内容には、ある種の共通性が見られるからである。したがって、返礼の品物に見られた違いは、同じ内容をどのように示すのか、という表現のしかたの問題になる。

では、その共通性とは何なのか。それは「救われた」ということである。
エクス・ヴォート
 ex voto に添えられている奉納者の言葉、直接 エクス・ヴォート ex voto に書きこまれた

(縫いこまれた) 文字，描かれている場面をみてゆけば，「救われた」「助かった」ことを示しているものばかりである。以下に文字化された奉納者のメッセージをいくつか挙げてみる。

奉納者のメッセージ

1. 娘コスタンツァは発作に苦しんでいた。聖コンスタンティヌスのおかげで，今はましになっている（ヴァッレドリア）
2. 賜った恩恵のため，聖コンスタンティヌスへ，デードラ・ガヴィーナ，ボロータナ，1973/7/6（写真3）
3. 聖コンスタンティヌスに賜った恩恵のため，エリザベッタ・デットーリから。1880年サッサリ（写真4）
4. 脊髄障害のために両脚が麻痺，希望なく，カリアリの海軍病院でアントニオ・カビッツァ先生に手術を受けたとき，聖コンスタンティヌスを見た。今そのお礼をする。ティティノ・デエログ，セディロ，1950年（写真5）
5. 賜った恩恵のため A.M.I.（写真6）
6. ひどい自動車事故で三つになる息子とともに奇跡的に助かったため。敬愛する聖コンスタンティヌスに心から感謝して，約束を果たす。デログ・カテリーナとマリオ・ラディネッティ，セッノリ

形はどうであれ ^{エクス・ヴォート} ex voto に示された内容は，要するに「危機的な状況に陥ったが，聖コンスタンティヌスのおかげで，救われたので，そのお礼をする」というものである。^{エクス・ヴォート} ex voto の文字や図像から，「危機的状況」をいくつか拾ってみる。

- ・男は眼病，女は乳房の病（文字）
- ・左脚の静脈炎（文字＋ベッドに寝ている写真）
- ・馬車の事故（馬車がひっくり返った場面）

- ・自動車事故（トラックとバイクの衝突場面）
- ・手術（腹部に傷をおった男性が手術台にのせられ、医師の手当てをうける場面）

125の^{エクス・ヴォート} ex voto を見るかぎり、事故や病気がほとんどで、恋が成就したお礼や事業に成功したお礼の類はひとつもなかった。ということは、「聖人のおかげで願いが叶った」と思っても、自己存在が揺らぐような体験が根底になれば、^{エクス・ヴォート} ex voto による返礼はしないと考えられる。つまり、その原因が何であれ、現実生活で自分が「危うい」と感じる局面で、聖人のおかげで救われたと信じたからこそ、^{エクス・ヴォート} ex voto を納めにくるのである。そうしたことは、図像（奉納絵や聖人カード）や言葉（grazia ricevuta「賜った恩恵」、miracolo concesso「下された奇蹟」）に示された、聖コンスタンティヌスの直接介入から読み取ることができる。^{エクス・ヴォート} ex voto が語っているのは、「事実をそのように解釈した」ということで、そこに「偶然性」の入りこむ余地はない。妄想だろうが、幻想だろうが、奉納者は grazia「恩恵」、miracolo「奇蹟」の力を認めることで、物語を合理化しなければならないのである。信すべき何かの中心には断定が必要だからである。

このように、^{エクス・ヴォート} ex voto はひとつの物語の成立によって支えられている。「恩恵」「奇蹟」の物語である。では、なぜ、そうした物語の成立と同時に「返礼」の義務が生じるのか。これはなかなか難しい問題で、おいそれと答えはだせない。教会によって解釈される「恩恵」「奇蹟」と「そういうものとして」奉納者が解釈する「恩恵」「奇蹟」のズレを、まず押えねばならないからである。しかし、無謀と知りつつ、^{エクス・ヴォート} ex voto から抽出された材料を使って、返礼のメカニズムを考えてみる。

聖人から奉納者へ「恩恵」「奇蹟」が与えられ、そして奉納者から聖人へ^{エクス・ヴォート} ex voto が納められるという二者間のモノの流れをみれば、贈与交換システムが作動しているように見える。（図1）ただし、聖コンスタンティヌスは彼岸に渡ってしまった存在（架空ではなく実在の人物）、しかも贈

られるモノは目に見えないとなれば、「互酬性」に規定された関係をそのまま当てはめるわけにはいかない。聖人には、返済の義務はないからである。^{エクス・ヴォート}ex voto がすべて「返礼」として納められている事実からも、モノの流れは一方的であることがわかる。とは言うものの、聖コンスタンティヌスと奉納者は、モノを媒介にした関係があることは否定できない。そこで、^{エクス・ヴォート}ex voto と非対称性の関係そのものに、返礼を義務づけるものを求めることにする。

^{エクス・ヴォート}ex voto に関連した表現に sciogliere il voto, scioglimento del voto がある。意味は、前者が動詞 sciogliere, 後者が名詞 scioglimento という違いはあるにせよ、どちらも「約束を果たす」ことである。voto が「約束」で、「果たす」にあたるのが sciogliere, scioglimento, 非常に示唆的な言葉が使われている。とくに、sciogliere, scioglimento には「^{ほど}解く、解放する」という意味があるので、何かに「拘束されている」「縛られている」状況が想像される。

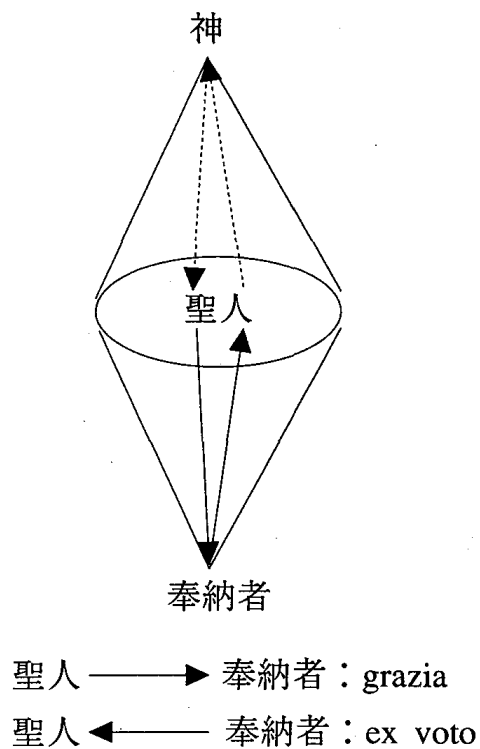


図1 聖人と奉納者の関係

写真8 聖コンスタンティヌス像の
ex voto

とすれば、voto は「^{ほど}解かねばならない約束」であるゆえに、拘束力をもつことになる。しかも、その「約束」は「恩恵」「奇蹟」と引きかえになっている。すなわち、聖人から賜ったモノが「約束を果す」義務を生じさせるのである。では、なぜ、「恩恵」「奇蹟」にそのような力があるのか。恩恵論や奇蹟論を避けながら、^{エクス・ヴォート}ex voto による返礼の事実、その答えを求めてみよう。聖人に「約束を果たす」方法はひとつ、形あるモノを贈ることしかない。ここに、「恩恵」「奇蹟」の謎を解く鍵がある。モノを要求するのは、「恩恵」「奇蹟」に他ならないからである。したがって、なぜ、「モノでなければならぬのか」という問いに答えることが、すなわち、その正体をつきとめることになる。

奉納者には、請求されているモノがわかっている。でなければ、個人的で自発的に納められた^{エクス・ヴォート}ex voto に規則性など存在しない。^{エクス・ヴォート}ex voto は個別性にみちているが、どれも要求されたモノを表していることに違いはないのである。とすれば、もう一度^{エクス・ヴォート}ex voto に語ってもらうしかないだろう。奉納者の肖像写真そのもの、聖コンスタンティヌス像そのもの（写真8）、^{エクス・ヴォート}grazia ricevuta（賜った恩恵）の文字そのもの（写真6）といった^{エクス・ヴォート}ex voto がある。肖像写真、聖人像、文字化された *grazia ricevuta* が、その他の^{エクス・ヴォート}ex voto を構成するパーツではなく、それ自体がそのまま奉納されているのである。まるで「そっくりそのままお返しします」とでも言っているように見える。ハート型は *grazia ricevuta* の表象、危機的場面を描いた奉納絵は、そのときの自分を表したもの、と解釈すれば、どの^{エクス・ヴォート}ex voto もある意味で「自身」の分身のようなものである。

もし、要求されているモノが「それ自身」となれば、賜ったモノも「それ」でなければならない。また、賜ったモノが「それ」であるならば、「それ」自身を相手に返す義務がある。要するに、「恩恵」「奇蹟」の受贈者は「それ」を保持することができないのである。では、「それ」とは一体何なのか。^{エクス・ヴォート}ex voto が自分自身を表しているとなれば、生（命）と考えてもよからう。「恩恵」「奇蹟」が返済をせまるものは、奉納者に与え

た生（命）ということになるが、自身の命は現実には譲渡できない。そこで、自身の命の代替物、自分の命を表すようなモノとして^{エクス・ヴォート}ex votoが奉納されるのである。ここに返礼がモノでなければならぬ理由がある。奉納行為は、sciogliere, scioglimentoの語義が示唆するように、「与えられた生に拘束され、その生の拘束を解く」ことである。もっと言えば、奉納行為の根底には、生は賜るもので、個人に所有されるべきものではないという考えが潜んでいる。生の根拠（源泉）はこちらではなく、あちらにあるべきものという理解が成立しなければ、^{エクス・ヴォート}ex votoによる返礼の義務は生じないのである。

紡ぎだされた「物語」の解体

「サントゥアリオ」^{エクス・ヴォート}santuarioは、私的な「物語」であるex votoが、語られる／読まれることによって、記録から記憶へと変身する場所である。そして、記憶としての^{エクス・ヴォート}ex voto「物語」を成り立たせる要素は、「聖コンスタンティヌス」San Costantino, 「恩恵」grazia, 「奇蹟」miracoloである。このような「物語」やそれが語られる場所の了解は、何を示しているのか。それを知るためには、santuario, San Costantino, grazia, miracoloといった言葉の対象が何であるかを見つけねばならない。対象をもつことのなかに、すでに対象についての理解と解釈が与えられているからである。そこで、ここでは、再構成された「物語」を解体してみることにする。

まずは、「物語」が語られる場所、「サントゥアリオ」^{エクス・ヴォート}santuarioから始めることにしよう。セディロの聖コンスタンティヌスのサントゥアリオは、7月5, 6, 7日の祭りのときだけ、村の人だけでなく、島のあちこち（主にサッサリ、オリスターノ）からやってくる人や観光客でにぎわいを見せる。このとき（教会が開放される）を利用して、信者は^{エクス・ヴォート}ex votoを納めたり、祈願したりするのである。ふだんのサントゥアリオは、田園空間に溶けこんでしまっ、「在る」のだが「ない」存在と言ってよい。つまり、

そこは物体としての教会を含んだ一画ではあるが、意味づけられた空間としては機能しないということである。人びとが chiesa「教会」よりも santuario「サントゥアリオ」という言葉を用いるのも、その空間を村のなかにある教会と区別しているからではないか。

では、しるしづけられた空間とはどのようなものなのか。たとえば、教会はサントゥアリオを次のように定義する。「信心という特別な動機から、ご加護を得るため、奉納をするための巡礼地として信者によって設けられ、信仰の公的な実践に開放された聖なる場所」[Rivera 1988:400]である。これに従えば、サントゥアリオは日常的なミサが行われる教会ではなく、信者主体の信仰が実践される場所になる。しかし、サントゥアリオは教会が設置したものではなく、「信者によって設けられた」のだから、人びとの積極的な意味づけがあると考えねばならない。事実、このサントゥアリオの別名は Santu Antinu (聖なる王), San Costantino (聖コンスタンティヌス) はあとからやってきたのである。特別な空間としての認識は、「由来・起源」をもつことにも表われる。その伝承はだいたい以下のような話である。

中世のころ、スカノ・モンティフェッロ村の男がサラセン人の海賊に襲われ、アフリカに連れ去られてしまった。奴隷として売られ、男が辛い日々を過していたある日のこと、目の前に高貴な人物が現れた。その人物は、皇帝コンスタンティヌスであると名のり、セディオロ近くに教会を建てると約束するなら、男を自由の身にしてやろうと言った。ほどなく、男はサルデーニャに戻ることができた。そして、男はおおいに感謝して、聖コンスタンティヌスの教会を建て、約束を果たした⁽⁶⁾。

伝承には、その場所が聖なるもの自身によって、選ばれたことが示されている。そこには、ある土地には「力」がもともと宿っているという理解がある。よって、人びとのそうした理解のもとでは、「サントゥアリオ」

は、聖なるものの住処になる。もっとも、これだけでは実際に分節化された空間を説明できない。なぜ、居住空間(村)の「外」にあるのか、という疑問が残ったままである。「偶然そうになった」では、「サントゥアリオ」という言葉は対象と出会わないことになってしまう。その存在は、空間性の獲得とセットになっているからである。

では、サントゥアリオ／聖なるものの住まい／居住空間(村)の「外」の意味するものを考えてみよう。そのために、聖なるものを聖人と神に分節して、人びと、聖コンスタンティヌス、神の三者関係を設定してみる。(図1) 神は分節化されない空間に「住む」、すなわち、どこにでもいるし、どこにもいない。一方、聖コンスタンティヌスには、分節された空間「サントゥアリオ」が付与される。しかも、その場所は村の「外」である。この「外」というのがくせもので、居住空間から疎外された(聖別された)空間であり、日常の生活圏(労働空間)でもある。つまり、祭りのときだけ開けられ(外になる)、ふだんは閉められている(内になる)空間なのである。「サントゥアリオ」は、内であり外であるという二重性、境界性をもったまま分節化された空間、言い換えれば、統一性のなかに二重性が解消されないものとして表された空間と考えられる。「サントゥアリオ」の場所は、その二重性、境界性の表象に他ならない。信徒会ではなく、教区教会が鍵をもつのは、「サントゥアリオ」の二重性を管理することではないだろうか。また、「サントゥアリオ」の主祭壇にはイエス・キリストの姿はない。聖コンスタンティヌスをまんなかに、右は聖シルベストロ、左は聖アンナの像三体が、正面の祭壇に並べられているのも、「サントゥアリオ」の空間性と無縁ではないような気がする⁽⁷⁾。

このような空間性をもつ「サントゥアリオ」の主、聖コンスタンティヌス^{あるじ}には、どのような了解があるのだろうか。それを解く鍵は、聖コンスタンティヌスの別称 Santu Antinu(聖なる王)にありそうだが、伝承をみるかぎり、その名はどこにも見当たらない。地名(Monte Santu Antine)やヌラゲの名(トッラルバ近く)として残っているだけである⁽⁸⁾。このこと

は、土着信仰のキリスト教化に成功したことを暗示すると考えられる。つまり、人びとは Santu Antinu (聖なる王) の移住先を、聖コンスタンティヌスという新たな対象に見つけたのである。Santu Antinu (聖なる王) は、聖コンスタンティヌスとして、再び「サントゥアリオ」の主^{あるじ}に迎えられたとも言える。もちろん、サルデーニャにおける歴史文化的なビザンツの影響を無視することはできないが、聖コンスタンティヌスは、「聖なる王」の表象であるからこそ、人びとに信仰されていると考えたほうがよい。

すでに見た^{エクス ヴォート} ex voto に描かれている聖コンスタンティヌス (あるいは聖人カード) は、軍旗をもって馬に跨った、力強く、勇ましい戦士のイメージである。(写真4, 7, 8) その源泉は、皇帝コンスタンティヌスがミルヴィオ橋でマクセンティウスを破ったという歴史的事実にあると言われている。しかし、そこに人びとが何かを見いださなければ、史実は記憶にならず、聖コンスタンティヌスの騎馬像によって、喚起されるものは何もない。聖コンスタンティヌス像は、皇帝戦士でなければならない。危機的な状況を破壊するような「力」を、人びとは皇帝コンスタンティヌスのミルヴィオ橋での勝利に見たのである。多くの^{エクス ヴォート} ex voto が語るように、聖コンスタンティヌスは、「そのような圧倒的な力」として了解されている。したがって、「サントゥアリオ」の主^{あるじ}は、聖コンスタンティヌスの姿をした「力」だと考えられる。

奉納者に「恩恵」grazia, 「奇蹟」miracolo と言われているものは「生」であり、どちらも「与えられる」ものであることはすでに述べたとおりである。このように「恩恵」、「奇蹟」が理解されているとすれば、聖コンスタンティヌスは、「生」の源であり、その分与者である。別言すれば、「力」は「生」の根源で、そこに個々の「生」がつながっているという理解と解釈が与えられていることになる。ここで、再び神を登場させ、三者関係(図1)から「生」の根源を捉えてみよう。^{エクス ヴォート} ex voto が返礼であることからわかるように、聖人は返納を要求すると認識されているが、神はそうではない。このズレ、モノによる返礼の有無は、何を意味するのか。「生」の

根源に対する了解ではないだろうか。神に返礼しないのは、神が一方的に「与えている」存在ではなく、「与えられている」とは思わないと仮定すれば、個々の「生」はその根源と断絶していることになる。つまり、神はアクセス不可能な「生」の根源として了解されるのである。それに対して、聖コンスタンティヌスは、「生」を分配し回収するものとして表されている。それは、個別であり共同でもある二重性をかかえた、交通可能な「生」の根源である。「サントゥアリオ」の^{あるじ}主に、これほどふさわしいものはないだろう。

解体した^{エクス ヴォート} ex voto の「物語」は、二重性が解消されない「生」の根源を、カトリックの言葉で表現したものである。聖コンスタンティヌスは、人びとの側から積極的に意味づけられるが、そうした「言語化」は逆に教会の管理をまねく。パラドックスのうえに成り立つ「物語」である。この「言語化」の問題は、稿をあらためて論じたい。

おわりに

ある村の教会で、出産まじかと思われる女性が一心に祈りながら、リボン^{リボン}を聖人旗からはずしていた。あとで知ったのだが、安産祈願で聖人からリボン^{リボン}を借りて、無事出産したら返すのである。この「貸借」関係に、奇妙な感じを覚えてから、人びとと聖人の世界に関心をもつようになった。そして、セディロの聖コンスタンティヌスへの^{エクス ヴォート} ex voto に圧倒されて、カトリックの「合理性」に頭を抱えてから、ずいぶん長い時間がたったことは、冒頭で述べたとおりである。

本稿は、その眠っていたテーマ、^{エクス ヴォート} ex voto 現象についての試論である。フィールドよりもスキームに依りかかりすぎた嫌いはあるが、調査資料の不足を埋めるために、やむを得ないところもある。いずれにしろ、聖コンスタンティヌスのサントゥアリオの二重性と「生」の根源の問題は、もっと突きつめて考える必要があるだろう。また、カトリックと「言語化」に

についても、直感的にわかるというお粗末なものでしかないため、フーコーの仕事^{エクス ヴォート}をフォローしていかなければならない。ex voto 研究は「高度の職人的技術」を要する断片的なテーマにみちているが、少なくとも、筆者は「内発的問題意識」に基づいて論じてゆきたいと思っている。今後も、壮大なテーマの妄想に憑かれる危険を覚悟で、素材の収集と理論修正のためにフィールドと読書の往復を地道に続けるしかない。

モースの『贈与論』に触発され、今村の「具体的事実や現象は、一方では記述の材料であり、普遍的概念のための実例として役立つが、他方では、これらの素材はけっして単なる素材や実例ではない。具体的事実こそが肝心であり、事実の提示自体が人間の普遍的な相の顕現である」[今村 2000: 278] という言葉を励ましに、^{エクス ヴォート}ex voto の謎に取り組んだのだが、果たして、謎は深まるばかりである。

註

- (1) カトリックでは、原則として ex voto は返礼としてののみ、納められるモノである。しかし、中世までは、神の怒りを鎮める目的と神への感謝の目的の両方があった。キリスト教以前の犠牲、供犠は、キリスト教化のはじまりとともに、*devozione*「信心」にシフトし、そして *culto*「崇拜」に吸収されていくと考えられる。民衆の宗教的慣行に、そうした変遷を辿ることができる。
- (2) 教会の ex voto への反発は強かったが、民衆の熱心な実践を利用する方針に転換する。奉納絵は宗教画と同じように考えられ、目につくところに飾られるようになる。ex voto は、ある意味で信仰のプロパガンダである。
- (3) ex voto が社会のある階層を規定するものとして扱われるようになるのは、20世紀に入ってからである。ただし、クローチェの影響が絶大であったので、ex voto が民衆独自のものとして扱われるのは、1960年代以降になる。民俗学的、人類学的研究のブームは1980年代にやってくる。P. Toschi の *Bibliografia degli ex voto italiani*, Olschi, 1970が、その地盤となり、P. Clemente の *Sondaggi sull'arte popolare* へと続くのである。本稿で紹介した解釈は、Clemente の仕事に負っている。
- (4) サッサリ大学などの助成をうけたプロジェクトで、3つのサントゥアリオ (Cagliari: Madonna di Bonaria, Alghero: Madonna di Valverde, Sedilo: San Costantino) の記録調査が行われた。その成果 (ex voto の写真および分類) は、現在、サッサリ大

学の哲学, 民族学・人類学, 芸術学, 文献学研究専攻に保管されている。

- (5) 信徒会の代表者で, 毎年互選される。聖人祭の運営や田園の教会の管理を任されている。一般的には, 田園の教会の鍵は信徒会が保管している。聖コンスタンティヌスの祭りは, 騎馬レース (L'Ardia) だが, これも「宗教儀礼」として教区司祭に管理されている。
- (6) F. Diana, *Il sacro suolo - Le leggende di fondazione dei santuari tra religione popolare, agiografia e folklore*, Grafica del Parteolla, 2003, pp.79-80. 男の設定は, 農夫であったり金持ちであったりする。また, 囚われの身となった場所が, コンスタンティノープルと伝えるものもある。
- (7) 原則として, 教会の主祭壇に聖人像が置かれることはない。しかし, 筆者が見てまわった田園の教会は, 聖人像が正面の祭壇に安置されているところがほとんどであった。聖コンスタンティヌスは東方教会では「13番目の使徒」とされ, 崇敬されているが, カトリックは公式の聖人と認めていない。2000年, *giubileo* を記念して出版された『サントゥアリオ巡礼ガイド』をみても, サルデーニャのサントゥアリオのページに, 聖コンスタンティヌスの名はない。
- (8) 聖コンスタンティヌスのサントゥアリオには, 先史時代の巨石がある。おそらく, その一帯が *Santu Antinu* と呼ばれていたのだろう。

参考文献

K. レーヴィット／柴田治三郎訳

1974(1973):『神と人間と世界』, 岩波書店

M. モース／有地享, 伊藤昌司, 山口俊夫訳

1976(1973):『社会学と社会人類学 I』, 弘文堂

1991(1965): *Teoria generale della magia*, Einaudi

上野千鶴子

1985:『構造主義の冒険』, 勁草書房

伊藤幹治

1995:『贈与交換の人類学』, 筑摩書房

B. マリノフスキー／泉靖一訳

1998(1980):『西太平洋の遠洋航海者』, 「世界の名著」71, 中央公論社

M. ゴドリエ／山内昶訳

2000:『贈与の謎』, 法政大学出版局

今村仁司

2000:『交易する人間 (ホモ・コムニカンス)』, 講談社選書メチエ

鷺田清一・大庭建編

2000(2001) : 『所有のエチカ』, ナカニシヤ出版

M. メルロ＝ポンティ／木田元編

2001 : 『人間の科学と現象学』, 「メルロ＝ポンティ・コレクション 1」, みすず書房

F. ニーチェ／信太正三訳

2003(1993) : 『善悪の彼岸 道德の系譜』, 「ニーチェ全集Ⅱ」, ちくま学芸文庫

吉本隆明

2006(1979) : 『改訂新版 共同幻想論』, 角川ソフィア文庫

Pietro. Clemente

1982 : *Sondaggi sull'arte popolare*, in *Storia dell'arte italiana, Forme e modelli* 11, Einaudi

Annamaria Rivera

1988 : *Il mago, il santo, la morte, la festa-Forme religiose nella cultura popolare*, Edizioni Dedalo

AA. VV.

1987 : *Pittura votiva e stampe popolari*, Electa

Antonio Francesco Spada

1994 : *Storia della Sardegna Cristiana e dei suoi Santi*, Editrice S'Alvure Oristano

Maria Margherita Satta

2000 : *I miracoli per grazia ricevuta-Religiosità popolare in Sardegna*, Editrice Democratica Sarda

Franco Diana

2003 : *Il sacro suolo-Le leggende di fondazione dei santuari tra religione popolare, agiografia e folklore*, Grafica del Parteolla

写真1, 3-8 : Maria Margherita Satta, op.cit.

写真2 : www.santuantinu.it